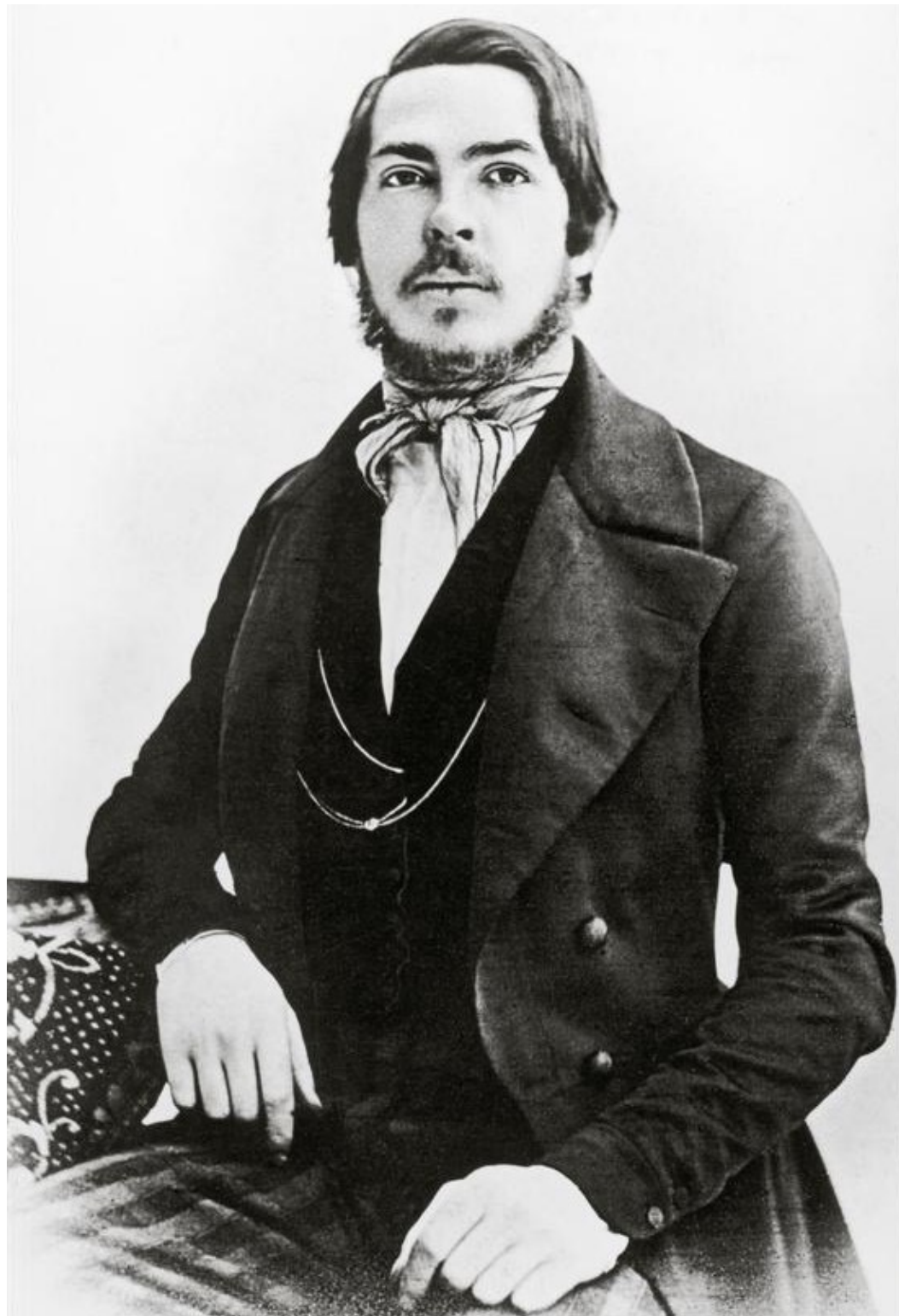


# 資本主義が生んだ孤立と貧困

政策社会学史①エンゲルス

上村 泰裕（名古屋大学）



Friedrich Engels 1820.11.28.~1895.8.5.

Friedrich Engels 1820.11.28.～1895.8.5.

---

経済学者、社会運動家。1842年父親の出資した紡績工場を経営するため渡英、資本主義の核心にふれる。『国民経済学批判大綱』『イギリスにおける労働者階級の状態』を著わしてマルクスを哲学から経済学に転向させ、以後、彼とともにマルクス主義を創始。『資本論』執筆を物心両面で援助し、遺稿を編集。マルクス主義を経済学からより広い一般科学に拡張しようとした。「第二インターナショナル」を指導して国際労働運動の中心となる。

# 1 なぜイギリスを研究したのか？

---

「イングランドの労働者階級の歴史は、前世紀〔18世紀〕後半、すなわち、蒸気機関と綿加工機械の発明とともに始まる。周知のように、こうした発明がきっかけとなって産業革命が開始された。この革命は同時にブルジョア社会全体をもかえたが、その歴史的意義はこんにちようやく認識されはじめている。イングランドは、ひっそりとおこなわれただけにそれだけいっそう強力であったこの大変動の、古典的な土地である。だからこそ、そのもっとも重要な結果であるプロレタリアートの発展にとっても、イングランドは古典的な国である。プロレタリアートをその境遇全体について、またあらゆる側面から研究できるのは、イングランドをおいてほかにはないのである。」

（『イギリスにおける労働者階級の状態』上25頁）

# 1 なぜイギリスを研究したのか？

---

「僕はイングランド人のために、すばらしい一冊の罪業記録簿を作成するつもりだ。僕は殺人や、強奪や、その他のありとあらゆるたくさんの犯罪のかどで、イングランドのブルジョアジーを全世界の前に告発する。それから僕は英語の序文を書いて、その抜き刷りを僕はイングランドの党首や、著述家や、議員に送るつもりだ。やつらに僕のことを思い出させてやるつもりなのだ。ところで、ねらいが別のところにあることは自明だ。つまり僕はドイツのブルジョアジーにずばりこうやってやる。おまえたちもイングランドのブルジョアジーと同じようにひどい。ただ虐待する際に、イングランドのブルジョアジーほど勇気がなく、首尾一貫しておらず、巧妙でないだけのことだ、と。」(1844年11月19日付のマルクスあての手紙。上323頁)

# 1 なぜイギリスを研究したのか？

「中産階級のねらいは…労働の生産物を売ることができるときは諸君の労働で私腹をこやし、こうした間接的な人肉商売から利益をあげることができなくなるやいなや、諸君を餓死にゆだねることにほかならないのだ、という事実の証拠を、わたしは十二分に集めたつもりである。」(上16頁)

「無産者はただ有産者によって搾取されるためにのみ存在しているのだ、そして有産者の役にたたなくなれば、ただ餓死するためにのみ存在しているのだということが、これほどあからさまに、これほど隠しだてなく主張されたことは、いまだかつてなかった。」(下239頁)

「ここイングランドほど予言の容易なところはない。なぜならば、ここでは社会のなかであらゆるものがきわめてはっきりと、しかも鋭く発展しているからである。革命は到来するにちがいない。問題の平和的解決をもたらすには、いまではすでに遅すぎる。」(下248頁)

# 1 なぜイギリスを研究したのか？

---

「資本の蓄積は分業を促進し、分業は労働者の数を増加させる。逆に、労働者の数の増加は分業を促進し、分業は資本の蓄積を大きくする。分業の促進と資本の蓄積にともなって、労働者はますます労働に依存し、特定の、きわめて一面的な、機械に類する労働に依存することになる。かくて、労働者は精神的・肉体的に機械へと格下げされ、人間であることをやめて一つの抽象的な活動体ないし胃袋となるのだが、そうなると、市場価格の変動や資本の投下や金持の気まぐれにますます左右される。同様に、ただ労働するしかない人間の増加によって、労働者間の競争が激しくなり、労働価格が引き下げられる。労働者のこうした境遇は工場労働において頂点に達する。」

(マルクス『経済学・哲学草稿』22頁)

## 2 最初の産業革命は何をもたらしたのか？

「ロンドンでは、その晩どこに寝たらよいかわからない人が五万人、毎朝目をさます。それらの人びとのうち、晩に一ペニ一か二、三ペンズうまく残すことができたもっとも幸運な者がいれゆる簡易宿泊所に行く。…だがなんという宿であろう！ 宿は上から下までベッドであふれ、一部屋にベッドが四つ、五つ、六つと、いれられるだけいれられている。どのベッドにも、四人、五人、六人の人間が、同じようにつめこめるだけつめこまれている。病人も健康な者も、老人も若者も、男も女も、酔っぱらいもしらふの者も、手あたりしだいに、すべてごちゃまぜにつめこまれている。そこでけんか、殴りあい、流血沙汰となる。だがベッド仲間が意気投合でもすれば、なお始末が悪い。盗みの約束がなされたり、人間らしさを増したわれわれのことはでは表現したくない、獣のようなことがなされる。」

(『イギリスにおける労働者階級の状態』上76頁)



## 2 最初の産業革命は何をもたらしたのか？

「〔マンチェスターの〕メドロック川が半円状に曲折したなか  
にあって、四方すべてを高い工場や、建物の建てられた高い岸  
や、堤防でとり囲まれたかなり深くぼ地に、約200戸のコ  
テージが二つの集団をなしている。たいていのコテージはそれ  
ぞれ二戸ずつ後ろの壁を同じくし、そこに合計4000人が住んで  
おり、そのほとんどはアイルランド人ばかりである。コテージ  
は古く、不潔で、もっとも小さい種類のものである。道路は平  
坦でなく、でこぼこで、一部未舗装で流水口もない。膨大なご  
みくず、吐き気をもよおさせる糞便が、よどんだ水たまりのあ  
いだに、いたるところにちらばっている。大気はそれらのもの  
の発散する悪臭で汚染され、一ダースもの工場の煙突の煙でく  
もり、重苦しくなっている。ぼろを着た多数の子供や女が、灰  
だまりや水たまりになじんでいる豚と同じような不潔さで、こ  
のあたりをうろついている。」(上126頁)

## 2 最初の産業革命は何をもたらしたのか？

---

「イングランドの労働者はこのような競争相手〔アイルランド人〕と——およそ文明国で可能な最低段階にあり、したがってまた他のだれよりも安い賃金しか必要としない競争相手と——戦わなければならない。…アイルランド人が競争相手となることのできるすべての部門で、イングランドの労働者の賃金はますます押し下げられるよりほかにはありえないのである。そしてこのような労働部門は多いのである。熟練をほとんどないしまったく必要としない労働部門は、すべてアイルランド人に開かれている。」(上185頁)

## 2 最初の産業革命は何をもたらしたのか？

---

「6月12日、マンチェスターで、ある少年が手を紡車のあいだで押しつぶされ、破傷風で死んだ。6月16日、サドルワースで、ある青年が紡車にはさまれ、巻きこまれて完全にこなごなになって死んだ。6月29日、マンチェスターに近いグリーンエイカーズ・ムアで、機械工場で働いていたある若い男が砥石の下に落ちて、肋骨を二本折られ、体をずたずたに引きさかれた。」

(1843年6月に「マンチェスター・ガーディアン」紙が報じた労働災害。  
下22頁)

## 2 最初の産業革命は何をもたらしたのか？

---

「社会が何百人ものプロレタリアを、あまりにも早い不自然な死に…おちいらざるをえないような状態におくならば、社会が何千人もの者から必要な生活条件を奪いとり、彼らを生活できない状況におくならば、…それは個人の行為とまさに同じように殺人である。」(上189頁)

「わたしがここでも別の箇所でも、権利と義務とを有する責任ある全体という意味で社会という言葉をつかうとき、社会の権力とは、すなわち、現在、政治的・社会的支配権をにぎっており、そのために同時に、支配への参画を許さない人びとの状態にたいして責任をもつ階級を意味する。このような支配階級とは、イングランドでは、他の全文明国と同様にブルジョアジーである。」(上191頁)

### 3 救貧法はなぜ改定されたのか？

---

「この〔借地農tenant farmersと作男との家父長的〕関係が存在しているかぎり、窮乏は労働者のあいだにわずかしきか、またはまれにしかあらわれなかった。…このような家父長的関係を解体し、作男を農場から追い出し、彼らを日雇い労働者にかえることは、借地農の利益でもあったのである。こうしたことは今世紀〔19世紀〕の20年代のおわりごろにはかなり一般的におこり、その結果、現在では、…潜在的であった過剰人口は解放され、賃金は抑制され、救貧税はいちじるしく高くなったのである。」(下184頁)

### 3 救貧法はなぜ改定されたのか？

---

「労働者間の競争は頂点に達し、賃金は最低限に落ち込んだ。旧救貧法が存在していたあいだは労働者には救貧基金からかねがあたえられたが、そのために賃金は当然になおいっそう低下した。いまや借地農が、賃金のできるだけ多くの部分を救貧金庫に肩がわりさせようとしたからである。すでに過剰人口によって必要となった救貧税の上昇は、これによって増進するばかりであった。そしてこのようにして新救貧法が必要となったのである…。」(下186頁)

### 3 救貧法はなぜ改定されたのか？

---

「プロレタリアートにたいするブルジョアジーのもっとも公然たる宣戦布告は、マルサスの人口論と、それから生まれた新救貧法である。…〔マルサスの理論の〕主要な結論を繰り返しておくならば、地上の人口はつねに過剰であり、したがってまた、窮乏や、困窮や、貧困や、不道德が支配せざるをえないこと、過剰で、したがってまたさまざまな階級にわかれて生存するのが人類の運命であり、永遠の天命であること、そのなかには、多かれ少なかれ貧乏で、みじめで、無知で、不道德な階級もあること、がそれである。

### 3 救貧法はなぜ改定されたのか？

---

さて、ここから実践にたいしては次のような結論…が出てくる。すなわち、競争によって他人の賃金を抑制している過剰人口を維持し、またその増加を刺戟することにしか役だたないのだから、慈善や救貧基金は意味をなさないこと、消費できる労働生産物は一定量しかなく、失業労働者が就職するごとにこれまで就業していた別の労働者が失業せざるをえないことになり、こうして民間の産業は救貧委員会管轄の産業のおかげで損害をこうむるので、救貧委員会による貧民の雇用も同様に無意味であること、したがって重要なのは過剰人口をやしなうことではなく、それをなんらかの方法で、できるかぎり制限すること、がそれである。」(下227頁)



### 3 救貧法はなぜ改定されたのか？

---

「さて、彼らは新救貧法を提案した。そしてそれは1834年に議  
会を通過して、現在にいたるまで効力をたもっている。金銭あ  
るいは食料による救済はすべて廃止された〔「院外救済の廃  
止」〕。みとめられた唯一の救済は、いたるところに急遽つく  
られた救貧院への収容であった。しかしこのような救貧院  
(workhouse) …は、この種の公共の慈善がなくてもまだなん  
とかやっていける見込みのあるすべての者を、震えあがらせず  
にはおかないたぐいのものである。…食事は極貧の就業労働者  
のそれよりもひどく、それでいて仕事はよりきつい〔劣等処遇  
の原則〕。そうでなければ、彼らは見るもあわれな外での生活  
よりも、救貧院にいることを好むであろう。」(下232頁)

### 3 救貧法はなぜ改定されたのか？

「少し前から、わたしたちの町の大通りで多数の乞食に出会います。ぼろぼろの服を着て、病気らしい姿にものをいわせたり、傷や身体の切断箇所をあらわにして、吐き気をもよおさせたりして、しばしばひじょうに恥知らずな、わずらわしいやりかたで、通行者の同情をさそおうとしております。救貧税を支払っているばかりか、慈善施設にも多額の寄付をしているので、このような不快で恥知らずなわずらわしさから保護される権利をもつだけのこととはしたはずだ、とわたくしは考えております。安心して市に出入りできるくらいの保護も市の警察がしてくれないのならば、いったいなんのためにこれほど高い税を支払って市の警察を維持しなくてはならないのでしょうか？ 多数の読者をもつ貴紙にこの一文が掲載されることが契機となって、当局がこのような厄介ものを除去してくだされば、と希望いたします。」（「マンチェスター・ガーディアン」紙への一婦人の投稿、1844年？ 下216頁）

# 出典

---

- ▶ エンゲルス『イギリスにおける労働者階級の状態——19世紀のロンドンとマンチェスター』（一條和生・杉山忠平訳、岩波文庫、1990年〔原著は1845年〕）
- ▶ マルクス『経済学・哲学草稿』（長谷川宏訳、光文社古典新訳文庫、2010年〔原著は1844年執筆、1932年刊行〕）

# 参考

- ▶ ハント『エンゲルス——マルクスに将軍と呼ばれた男』（東郷えりか訳、筑摩書房、2016年）